

## 七-八世紀ザブリスターンの三人の王

稲 葉 穰

### はじめに

七世紀半ばにスィースターンまで進出したアラブ・ムスリム勢力はそこを拠点として更に北、すなわちイスラーム地理書にいうザミーン・ダーワル、ルッハジュ、ザブリスターン、カーブル方面に向かおうとした。しかしムスリム軍はそこで予期せぬ強敵の抵抗にあい苦戦を余儀なくされる。他の地域においてあれほど目ざましい戦果をあげたムスリム軍がそれらの地を最終的に屈服させるまでそれから二世紀以上もの時間を要した。

上述の地においてムスリムの北進を阻んだのは、イスラーム史料において RTBYL あるいは ZNBYL<sup>1)</sup> と呼ばれるザブリスターンの王と、同じくカーブルシャーと呼ばれるカーブルのテュルク系の支配者であった。この時期に関して利用し得る中国側の史料はザブリスターンを「漕矩吒」あるいは「謝颶」、カーピシー、カーブル地方を「迦畢試」あるいは「罽賓」と呼び、これらの地に関して若干の情報を提供してくれる。両側の史料を組み合わせることでイスラーム化以前のこれらの地域の歴史を再構築する作業は、マルクヴァルト J. Marquart 以来内外の研究者達によって試みられてきた。しかし、絶対的な資料不足という状況下いまだ多くの問題が未解決のまま残されている。RTBYL/ZNBYL やカーブルシャーの問題もそのひとつである。近年この時期の同地の歴史やカーブルシャー、RTBYL/ZNBYL について述べる研究が相次いで公刊された。中でも最も新しい出版のウィング A. Wink の著書の関連部分 [1990: 112-124] はマルクヴァルト、ギルシュマン R. Ghirshman 以来のヨーロッパにおける伝統的理解をそのまま受け継いだものであるといえる。マルクヴァルトはその当時(二十世紀初頭)利用可能であった資料を総合して七、八世紀のカーピシー、カーブル、ザブリスターンの状況を大略次のように説明した。すなわち北はカーピシーから西はガンダーラ、南はザブリスターンにいたる地域は、中国の隋にあたる時代、一つの国であった。唐代初め、この国は二つに分裂し、

北はカーピシー、ガンダーラ地方、南はザーブリスターンとなった。また第三の国としてカーブルを中心としてテュルク系の支配者に治められるフリジスタナ(玄奘の記す「弗栗特薩儻那」)があったが、これは後にザーブリスターンと合一し、ザーブリスターンにテュルク系支配者が現れる。また北のカーピシーもアラブの北進を機にザーブリスターンの影響下に入り始め、710-720の間に後者に服属した。それはザーブリスターンの支配者としてイスラーム史料に現れる Zambil(=RTBYL/ZNBYL)の勢力増大と機を一にする [Marquart 1901 : 289-290], と。この説では、シャヴァンヌ E. Chavannes [1903 : 161] が『新唐書』巻221下の謝颯の条に「後遂臣屬賓」とあるのを誤って屬賓が謝颯に臣従したと解したのと同様に、カーピシーとザーブリスターンの関係が逆に捉えられている。その後ペテク L. Petech [1964 : 190-191] が自ら漢文史料を吟味し、同時期のカーピシーとザーブリスターンの関係について、正しく前者を主、後者を従としたのと対照的である。後掲の慧超の記事を利用し得なかったマルクヴァルトが屬賓における王統の交代という画期的事件の意義を十分に把握できていないのは止むなしとしても、慧超の記事から我々はテュルク系王朝の出現が屬賓で起こったのであり、その波及効果も屬賓から謝颯へ、すなわちカーピシー、カーブルからザーブリスターンへ、という方向でもたらされたと考えねばならない。それゆえマルクヴァルト説には大いに修正を施さねばならないが、その意味ではこの説を大部分踏襲したウィングの書の関連部分は up to date であるとはいえない。

一方慧超の記事の持つ意義を正しく認識し、あらためて当該地域の歴史を組み立てようとしたのがラフマン Abdur Rahman と桑山正進である。ラフマン [1979] は従来の諸資料を再検討し、この時期の同地の歴史、特にカーブルのテュルクシャー朝の成立事情やザーブリスターンの状況に関して多くの重要な見解を提出した。一方わが国においても考古、文献資料を駆使して北インド、アフガニスタンの四-九世紀の歴史を検討した桑山正進の著書 [1990] が出版された。ラフマンの研究と同様、同書の第五章「七、八世紀のカーピシー」は同時期のカーピシー、カーブル、ザーブリスターンに関してやはり通説とは異なる魅力的な創見を提出している。両者はともに従来不明であった事柄の多くに光を当てているのであるが、ラフマンの著書が主にイスラーム史料とインド側のいくつかの資料、貨幣資料に立脚しているのに比して桑山の著書は中国文献と考古資料を縦横に用いているという特徴がある。基づく資料の差によるのかどうか明らかではないが、両者が互いに理解を異にする点もある。両者の説を比較統合し、僅かながらも新たな情報を付け加えることによって七、八世紀の当該地域の状況に関する新たな展望が得られる

可能性がある。

本稿は基本的にイスラーム史料において RTBYL/ZNBYL と呼ばれるザーブリスターンの王がいかなる存在であったのかを探ることを眼目とするが、この時期の同地の歴史はカーピシー、カーブル地方のそれと密接に関連を持っており、前者を理解するためには後者を視野に入れることが不可欠である。そこでまず第一にカーピシー、カーブルにおける王統の交代、すなわちカーブルにおけるテュルクシャー朝の成立事情に関してのラフマン、桑山の説を検討し、次いでザーブリスターンの王について考えるという手順をとる。そのうえですでに七世紀から、カーブルのみならずザーブリスターンまでもがテュルク系の支配者により支配されていたという可能性を提示したい。

### 1. カーブルにおけるテュルクシャー朝の成立

ラフマン、桑山両者においてテュルクシャー朝成立に大まかな枠組みを与えるとしてとられているのは640年代に同地を訪れた玄奘の『大唐西域記』、および725年頃に同地を訪れたとおぼしき慧超の『往五天竺国伝』の以下のような記事である。

〈玄奘〉

「王は刹利種(クシャトリア)であり、智略があり、性格は勇烈で、威は近隣の地域をおそれさせ、十余国を統轄している。(王刹利種也。有智略。性勇烈。威懾鄰境。統十餘國。)[『大唐西域記』卷1 迦畢試国の条(章巽校点本：23)；桑山 1987：22-23]

〈慧超〉

「さらに迦葉弥羅国の西北、山の向こうへ一か月行程行くと建駄羅に達する。ここの王と軍はおしなべて突厥である。住民は胡種でバラモンもいる。この国はもとは罽賓王の治下にあった。そこで突厥王の阿耶が部衆、軍隊を率いてその罽賓王に身を寄せていたが、後に突厥が強力になると、すぐにその罽賓王を殺して自分で国王になった。(又從迦葉弥羅國西北隔一月程。至建駄羅。此王及兵馬。忽是突厥。土人是胡。兼有婆羅門。此國舊是罽賓王々化。爲此突厥王阿耶領一部落兵馬。投彼罽賓王。便利彼罽賓王。自爲國主。)[『往五天竺国伝』建駄羅国の条；羽田 1941：619]

玄奘の記すカーピシー王と慧超の罽賓の突厥(テュルク)王は明らかに異なる家系の王である。そして慧超の記述がイスラーム史料に現れるカーブルシャー、すなわちカーブルのテュルクシャーについて述べたものであることは確実と言ってよい([桑山 1990：262-263]参照)。ではこの二つの記事の間の時期にテュルクシャー朝はどのようにして興ったのか。

ラフマン [1979 : 42, 46-47] は、後掲の Tabari の記事と慧超の記事を結び付けてカーブルシャーと RTBYL/ZNBYL が同族であったとし、その起源をハラジュ (Khalaj) のテュルクに求める<sup>2)</sup>。そして665年頃に一旦ムスリムに征服されたカーブルを奪回したカーブルシャーは、同時にカーピシーの前王朝の王を殺して王位を篡奪したのだと考える。またハラジュ＝エフタル説に従って、カーブルシャーをもエフタルの残滓と考え、イスラーム史料においてはトルコ語を話すエフタル、あるいは混血の者たちも「テュルク」と呼ばれたのであろうとしている。

一方桑山 [1990 : 267-269] は『大唐西域記』巻12弗栗特薩憐那国の条の突厥王に注目し、それをマルクヴァルト同様カーブルを中心としてワルダクをも含める地域に比定しようとする。そして同国が七世紀にはカーピシーの「馨孽」王朝の属国であったらうとし、それを慧超の記す「突厥王の阿耶」、al-Bīrūnī のいうところのテュルクシャー朝の始祖 Barhategin と結び付ける考えは極めて魅力的だとしている。この考えに立てば、玄奘の往訪以後カーブル地方のテュルク勢力の力が増大し、ついには彼らは「罽賓」の王統を篡奪するにいたったと推論できる。またそれにもないカーピシー、カーブル地方の中心がカーピシー(現ベグラームを中心とする地域)からカーブルに徐々に移動していったとすれば、漢文史料にはカーピシーばかりが、イスラーム史料にはカーブルのみが現れるという謎も解けるかも知れない、と述べるのである。最後の部分を補足するなら、この地の歴史を語るのはこの時期までは主に漢文史料、この時期以後は主にイスラーム史料なのであり、カーピシーからカーブルへの中心地の移動は丁度両史料のはざかいに生じた出来事と考えられるということである。一方その成立時期に関して桑山は、「罽賓王とテュルク王との交替の時期を、八世紀初頭をあまりさかのぼらない七世紀のある時点に求めることができよう。」[1990 : 263] とし、時期の絞り込みを慎重に避けている。従来より「ヒンドークシュの南のエフタル」の存在に懐疑的であった桑山はラフマンとは対照的にこのテュルクシャーの起源について玄奘のいう「突厥」をそのままテュルクと受け取るのみでそれ以上の穿鑿はしていない。

両者の説を比較してみると最も大きな相違点は、テュルクシャー朝の起源、その成立時期、の二つであるといえよう。結論から言えば桑山説の方がよりすぐれている。ラフマン説は二つの大きな問題を抱えているからである。その第一は、彼がカーピシーの首都、桑山の用語を借用するなら馨孽朝の王の居城はカーブルではなくベグラームであったという事実を無視していることである。すなわちカーブルがカーブルシャーによってムスリムの手から奪還されたとしても、それがすぐに王権奪取にはつながらないという点を

念頭に置かずに成立時期を論じているのである。カーブル奪回が665年頃カーブルシャーによりなされたことは確かかも知れないが、慧超の記録にある「後に突厥が強力になると」という一節を考えると、カーブルのテュルク勢力の強大化がすぐさまカーピシー全体の王統の交替にはつながらなかった、言い換えれば両者が並立していた時期がしばらくあった、と考える方が自然であろう。桑山によればギルシュマンはベグラーム第Ⅲ期の終焉に関してそれが破壊や火災を被った痕がないとの観察を行っているが、だとするとカーピシー大都城は徐々に寒村化していったとも考えられる<sup>3)</sup>。それが事実ならばカーブル勢力の強大化とカーピシー＝カーブル地方の中心のカーブルへの移行の過程は漸次進行したものであり馨孛朝の王の殺害はその頂点として現れた、すなわちしばらくはカーブル勢力とカーピシー王権が並立した時期があった、と考えた方がよいであろう。少なくとも我々は馨孛朝の王が何時テュルクシャーに殺されたかを確定させしめる如何なる資料も有していないのである。

第二の問題点はテュルクシャー朝の起源であるが、それをハラジュに求める説はラフマンに始まるわけではなくやはり既にマルクヴァルトに先例がある。その後ペテク[1964:193-194]も『新唐書』や『冊府元龜』に現れる「葛羅達支特勤」なる称号をハラジュと結び付けることを提案している。確かに後代の史料、特にイスラーム史料から十世紀以前に当該地域に居たと確定しうる「テュルク」は現在のところハラジュだけであり([Minorsky 1970:347-348]参照)、それをテュルクシャー朝と結び付ける考えは現状では一番可能性があるといえよう。しかし問題はそこにエフタルを持ち出すことである。桑山が「ヒンドゥークシュの南のエフタル」の存在を疑うのは、エフタルはトハリスターンからカラコルム西脈ルートを通ってガンダーラを支配したのであり彼らがいわゆるヒンドゥークシュ西脈ルートを越えて南進したという証拠はどこにもない、という自身の考え[桑山 1990:第三章]によるのであるが、カーピシー、カーブル、ザブリストーン地方にエフタルがいたとの従来の説の根拠は確かにそれほど強いものではないようである([稲葉 1991]参照)。従来研究者達、特にイスラーム史料を主に用いる人々は、初期イスラーム史料はエフタルをテュルクと混同し明らかにエフタルである者達をも「テュルク」と呼んだとして、カーピシー、カーブル、ザブリストーン地方に関して史料に見られる「テュルク」も実はエフタルのことである、としてきた(例えば[Bosworth 1968:33])。確かにイスラーム史料にはエフタルとテュルクを混同する傾向があるのかもしれない。しかしながら少なくともこの場合に限ってはその議論が成立しない可能性がある。この時代あるいはそれに先立つ中国側の史料ではエフタルとテュルクは区別し

て認識されている(例えば『隋書』等の「嚙哒」「挹怛」=エフタルと「突厥」=テュルク)。玄奘もやはりそのような認識を持っていたようで、『大唐西域記』巻12呾摩咀羅国の条では同地のエフタルとおぼしき人々を突厥と区別して記述している([榎 1951:138; 桑山 1987:116-117, 270]参照)。そのような玄奘が「突厥」と記す弗栗特薩儻那の王がエフタルあるいはその残滓であったとは考えにくい。玄奘の「突厥」はあくまでテュルクであり、同様に慧超の「突厥」もテュルクであったと考えられるのである。いずれにせよこの問題の背後にはエフタルの ethnicity やハラジュとの関係といったエフタル研究全体に関わる未解決の難問が横たわっている。そのような状況下では七、八世紀のカーピシー、カーブル、ザープリスターン地方に関してイスラーム史料、中国史料がともに「テュルク」と言う存在を無理にエフタルに結び付けることは避けるべきであろう。その点、桑山はテュルクシャーの起源や ethnicity の問題を避け、それ以外の部分で多くの事実をなるべく整合的に解釈できる説を提出している。この考えによってカーブル周辺に残る仏教遺跡の編年を八世紀以降のカーブルの隆盛と関連づけられるし、なにより玄奘、慧超、そしてイスラーム史料に散在した情報が一つの糸に結びあわされた意義は大きい。それゆえ、起源の問題をひとまず措くなら桑山説の方が明らかに仮説としてすぐれている。

## 2. 七、八世紀のザープリスターンの支配者たち

次に上で確認したカーピシー、カーブル地方の歴史的状況を基礎としてザープリスターンの歴史、およびその支配者について考えてみる。この時期のザープリスターンの支配者として我々はイスラーム史料に現れる RTBYL/ZNBYL の他に二人の王を知っている。一人は玄奘の記す「漕矩吒国」の王であり、いま一人は慧超の記録する「謝颯国」の王である。一方 RTBYL/ZNBYL は七世紀後半頃の事件において史料に初出する。この三者は同じような時代に同じような地域を支配した王達であったはずであるが、彼らの関係をはっきりと論じようとした研究者はそう多くはなく、ラフマン、桑山を除いてはかろうじてベテクが挙げられるくらいである。以下まず三者に関する資料を一瞥し、次いでこの問題に関するラフマン、桑山両者の説を検討してみる。

### 1. 漕矩吒王

「今王はとみに信心深く、代々あとをうけてすぐれた福をおこすことにつとめ、明敏で学問を好む。(今王淳信。累葉承統。務興勝福。敏而好学)」[『大唐西域記』巻12漕矩吒国の条(章異校点本:280); 桑山 1987:112]

この記述から、玄奘当時この王が「代々あとをつぐ」者であり、それゆえその家系が同地に

においてかなり年月を経ている、少なくとも当時の王が初代とか、二代目とかではなかったとわかる。玄奘は王が何系かを言わないが、隣国の弗栗特薩嚩那の王をわざわざ突厥であるといっていることを考え合わせると、この王は種別はともかく非突厥であった可能性が極めて高いと考えられる。なおマルクヴァルトはこの王をもエフタル系であったとする [Marquart & de Groot 1915 : 253-254, 259]。

## 2. 謝颯王

「さらにこの罽賓国より西へ七日行くと、謝颯国に達する。そこは社護羅薩他那と自称する。住民は胡種で、王と軍は突厥である。その王は罽賓王の甥である。自らその部衆、軍隊を率いてこの国に住んでいる。他国に臣属していないし、おじにも属さない。(又從此罽賓国西行七日至謝颯国。彼自云社護羅薩他那。土人是胡。王及兵馬。即是突厥。其王即是罽賓王姪兒。自把部落兵馬住於此國。不屬餘國。亦不屬阿叔。)」[『往五天竺国伝』謝颯国の条；羽田 1941 : 621-622]

慧超のこの記述から素直に考えれば、玄奘の時から80年ほどして同地の王が変わっているということになる。

## 3. RTBYL/ZNBYL

Ṭabarī, Baladhurī, Ya'qūbī (Historiae.), *Ta'rikh-i Sīstān* などの年代記や地理書等多くのイスラーム史料に現われる。*Ta'rikh-i Sīstān* を除いては概ね RTBYL と記されている。長期にわたって繰り返し現われることからこれは個人名ではなく、称号あるいは家系の名であろうと考えられている。「スイジスターン (= スィースターン) 王」とされたり [Buldān. : 280], 「ザブリスターン王」とされたり [Tanbrh. : 314], あるいは「スイジスターン, アッルッハジュ, バラド・アッダーワル (Balad al-Dāwar = ザミン・ダーワル) の王」と呼ばれたり [IKh. : 40] する。ザブリスターンを夏営地, ルッハジュを冬営地としたとの記録もある [Murgotten 1969 : 153]。狭義のスィースターンは七世紀中葉以降アラブ・ムスリムの支配下にあったので, RTBYL/ZNBYL はそこから北東に向かって弧を描くようにカーブルまでの地域を支配した王と考えられる。

ラフマン [1979 : 66-67, 180] はザブリスターンの RTBYL/ZNBYL の王国の成立に関して次のような筋書きを提示する。<sup>1</sup>すなわち, テュルクシャー朝の「始祖 Barhategin」はカーブルを取り戻すとザブリスターンにも勢力をのぼし, 自らの兄弟を「eltābir」として同地におくり支配させた。この「eltābir」という称号がアラブ人によりあやまって「Rutbrī」と写された。680年頃<sup>1)</sup>「Rutbrī」はテュルクシャーと仲たがいをし, スィースターンを支配していた Salm b. Ziyad に援助を求めてきた。ムスリム側の援助をうけて

「Rutbrl」はザーブリスターンにカーブルシャーから独立した確固たる勢力を築いた。その後同地の王達は皆、この名前でもって知られるようになった。第二次内乱を機に「Rutbrl」は再びムスリムに背き、ザーブリスターン、ルッハジュ、ブストあたりにおいて北進を狙うムスリムの最大の敵となった、と。ラフマンの説の基本となっているのは慧超の「謝颯王」を RTBYL/ZNBYL と同一視し、それを七世紀後半にザーブリスターンに北からやってきた征服者とみなす考えである。

一方桑山はやや異なる解釈をしている。「720年代慧超往訪時代のジャウラスターナは土着の王たる誓屈爾(誓颯)がいた。土人は胡とする慧超に従うなら、胡王が誓屈爾である。彼に葛達羅支頡利發なるテュルク官号を授けてジャウラスターナを牛耳ったのがカーピシー王であった。この王は時代から推定して多分烏散特勤灑であった可能性がある。かれは葛達羅支特勤の官号をもってジャウラスターナ統治を兼ねた。しかし、実際にそこへ派遣された、いわば吐屯の役は、慧超のいうカーピシー王の姪が果たしていたのである。慧超の目にはこの姪がジャウラスターナ王として映ったのである。阿叔にも属さないというのは、そこで姪たる吐屯が自擅していたのであるかも知れない。」[1990: 265-266]。ここでは(1)テュルクシャー、(2)その甥の吐屯、(3)土着王にしてテュルク官号を受けた誓屈爾、という三重の支配構造が想定されている。表現を変えるなら(2)が慧超の「謝颯王」、(3)がおそらくは玄奘の「漕矩吒王」の系統の王ということになるだろう。ただしイスラーム史料において RTBYL/ZNBYL と呼ばれたのがそのどちらであったのかについては同定を控えている。

ここではイスラーム史料と中国史料を整合的に結び付けようとしたラフマン説の方が簡潔で理解しやすい。後で見るように桑山の示す三重構造を受け入れるのは苦しいからである。しかしながらラフマン説の方も全体的に論証の手續きに欠け資料的にも不十分な点が多い。そこで以下ラフマン説の欠を補うべくいくつかの点を再度検討してみる。

もっとも重大なのは、彼が史料としてあげる Tabari の記事の解釈の問題である。Tabari [I. 2706] には「スイースターンの征服」と題された項目の中に次のような一節がある。

「... やがて Mu'awiya の時代となった。al-shah は兄弟——その当時の al-shah の兄弟の名は RTBYL であった——のもとから逃げてそこ(スイースターン)にある AML と呼ばれるまちへやってきた。そして当時スイースターンを治めていた Salm b. Ziyad に服してきた。彼(サルム)はそれを喜び、彼らに対して[身柄の安全保証の]約束をしてやり、彼らをその地に留まらせた。サルムはムアーウィアに彼が彼(al-shah)



に対する勝利を収めたことを知らせる手紙を書いた。ムアーウィアは言った。「我が甥は事[の成りゆき]を喜んでおる。しかしそれは私を悲しませ、きっと彼をも悲しませるに違いない。」人々は言った。「信者の長よ。何故でしょうか？」彼は言った。「なぜなら AML のまちとザランジュの間は[道が]険しく狭い。そこには NKR GHDR の民がいる。やがて手綱は解けてしまうだろう。彼らから生ずることがらはたやすく AML のまちまちすべてをおおってしまうだろう。」ともあれ彼ら(al-shah 達)に対して Ibn Ziyad の約束どおりにことが定められた。

ムアーウィアの死後、内乱が生じると al-shah は異教へとどった。そして AML を征服した。RTBYL は al-shah をおそれ、彼が当時(al-yauma)そこにいたところの地で抗戦した。[スィースターンの]人々が彼から注意をそらすと彼はそれでは満足できなくなり、ザランジュを欲するようになった。彼はそこへ攻めていき、攻囲した。それはバヌアからの援軍が到着するまで続いた。RTBYL とその配下達が[そこへ]やってきた。彼らはまるで喉にひっかかった骨のようにその地に留まることとなった。それは今でも取り去られていない。この地はムアーウィアが死ぬまでは服していたのであった。」

この記事の中ではウマイヤ朝カリフ、ムアーウィア時代(661-680)にムスリムの援助を求めて逃れてきたのは RTBYL/ZNBYL ではなく shah であるということになっている。ところがラフマンは何の断りもなく文中の RTBYL/ZNBYL と shah の役割を入れ替えて考えており、それが彼の説の基礎をなしているのである。実は最初にこの記事に注目ししかもラフマンと同様の読み変えを示唆したのはまたもマルクヴァルト[1901:38]であった。最近ではマロート M. Maróth[1990]も当時の政情を検討しこの資料操作を追認している。しかし管見の限りこの情報は Ṭabarī にのみ見えるものであり、しかもそれを読み変えた形で利用しようとするならば何らかの手続きによってその操作の正当性が示されねばならない。そこでそのような資料操作の必然性を検証するために、この記事をおのま受け入れた場合 shah と RTBYL/ZNBYL をそれぞれ『大唐西域記』、『往五天竺国伝』の登場人物の誰に比定できるか、その可能性を探ってみることとする。考慮に入れるべき人物は限られている。すなわち①馨孽朝の王(玄奘時代のカーピシー王の系統)、②ザブリストーンの土着の王(玄奘の時の漕矩吒王の系統)、③慧超の時の罽賓のテュルク王(カーブルシャー=テュルクシャー)、④同じく慧超の時の謝颯のテュルク王である。

① shah=馨孽朝の王：全く不可能ではない。ただし彼が自領であったガンダーラで

はなくスィースターン方面に逃れたという点に疑問が残るし、なにより RTBYL/ZNBYL の比定が容易でない。すなわち馨摩朝の王(非テュルク)と RTBYL/ZNBYL が兄弟ならば、慧超の謝颯王(テュルク)と RTBYL/ZNBYL は別人ということになる。すると桑山説のように慧超の来訪時ザープリスターンに二人の支配者を想定する必要があるが生じ、土着の非テュルク王、すなわち漕矩吒王がイスラーム史料で RTBYL/ZNBYL と呼ばれたことになる。しかしイスラーム史料に現われるザープリスターンの支配者は RTBYL/ZNBYL 唯一人である。それが慧超の眼には唯一の王として映ったテュルク王の支配下にあったと考えるのはいかにも苦しい。慧超は謝颯国の記述の中で「突厥の大首領娑鐸幹」なる者に言及しているが、もしイスラーム史料にあればほど強力な王として現れる RTBYL/ZNBYL が謝颯のテュルク王の支配下にあったのなら慧超がそれに言及していてもよさそうなものである。

② shah = ザープリスターンの土着の王(漕矩吒王の系統)：スィースターン方面に逃れてくる可能性は馨摩朝の王よりも高い。しかし彼の兄弟である RTBYL/ZNBYL を探すのもっと困難になる。上述のように馨摩朝の王と漕矩吒王が兄弟であった可能性は極めて低い。とすると残る候補はカーブルシャー、謝颯のテュルク王の二人であるが、これは両方ともテュルクであり非テュルクの筈の漕矩吒王と兄弟であったとは考えられない。

③ shah = 罽賓のテュルク王：その兄弟 RTBYL/ZNBYL は同じテュルクの謝颯王(実は後段で見るとおり慧超の時の謝颯王の父)にあたることになる。しかしそうすると前述の如く665年頃にカーブル奪回の主役となったカーブルシャーが十数年後に玉座からおわれ、しかもわざわざスィースターン方面に逃げてきたということになる。そしてその時点で南の方からムスリム、shah、RTBYL/ZNBYL が並んでおり、それは shah がムスリムに背いた後も同様だったということになる。その後ムスリム軍とブスト、ルッハジュ、ザープリスターンで戦っているのが明らかに RTBYL/ZNBYL であり続けるという事実をみても力関係位置関係が逆転しているのは明白である。

④ shah = 謝颯のテュルク王：ほぼ不可能である。この場合その兄弟 RTBYL/ZNBYL は同族の罽賓のテュルク王すなわちカーブルのテュルクシャーということになるが、両者はイスラーム史料にはっきり別人として現れるのである。

以上の検討を通じ Ṭabarī の記事をそのまま受け入れた場合、我々の知る他の情報との間に矛盾が起きることが明らかになった。となるともとの Ṭabarī の記述に問題が含まれていることになる。そこで今度はマルクヴァルト、ラフマンのように文中の RTBYL

と shah を入れ替えて考えてみる。すると shah のもとから逃れて AML のまちにやってきたのは RTBYL/ZNBYL であり、彼がムアウィアの死後ムスリムに背きスィースターンをも脅かした、ということになる。なおマルクヴァルトは RTBYL/ZNBYL と shah の入れ替えとともに「AML のまち」はただししくは「Zabul のまち」かも知れないとの意見を加えている。確かにアフガニスタン東・南部に AML あるいはそれに類似した名を持つまちは歴史上知られていない。逃げてきてそのまちに留まったのが RTBYL/ZNBYL だと考える場合、マルクヴァルトの指摘は十分に可能性がある。だとすれば shah から逃れてきた RTBYL/ZNBYL は Zabul のまち(おそらくガズナ)<sup>6)</sup>に留まり自立したことになる。

もちろん以上は仮説に過ぎないが、この仮説を採用することによって得られる成果は大きい。すなわちこの Ṭabarī の記述は上のように読み変えた形でなら玄奘と慧超の記述をつなぎあわせ、漕矩吒王、謝颯王と RTBYL/ZNBYL の関係を明らかにするための極めて貴重な証言となるのである。

最も重要なのは、Ṭabarī が shah と RTBYL/ZNBYL を兄弟だとしていることである。テュルクシャー朝の成立時期に関するラフマン説のところで述べたように、ラフマンはこの記事と、慧超が謝颯王は鬪賓王の甥であると述べることをもってカーブルシャーと RTBYL/ZNBYL は同族だとしている。この考えが正しければ慧超の時の謝颯王は Ṭabarī に出てくる RTBYL/ZNBYL の息子ということになるが、Ya'qūbī [Historiae: II. 324] によればカリフ・ヤズィードの時代、やはり Salm b. Ziyad がホラーサーン総督であったとき(おそらく683年頃)将軍 'Abd Allah b. Umayya がスィースターンに送られ、RTBYL/ZNBYL と戦ってそれを殺した、とされ、また Baladhurī [Murgotten 1969: 149] によればおそらくは686-7年頃スィースターン総督 'Abd al-'Azīz b. 'Abd Allah b. Āmir の将軍 Abū Afra' がスィースターンにおいて RTBYL/ZNBYL を殺したという。また Baladhurī は続けて、カリフ 'Abd al-Malik の時代、'Abd Allah b. Umayya がスィースターンに派遣され、そこで殺された先代の後を継いだ RTBYL/ZNBYL と戦った(おそらく693-4年)と記す。ムスリム側の人名と年が食い違うが、680年から慧超の時代までの間に、ザブリスターン方面で RTBYL/ZNBYL という名の王が殺され、代替わりがあったという点は認めてよい。逆にいえば、慧超の謝颯王とイスラーム史料の RTBYL/ZNBYL を同一視する立場を取るなら、shah と RTBYL/ZNBYL が兄弟であったという Ṭabarī の記述は当然期待される事実を告げているのである。

それでは慧超の謝颯王と RTBYL/ZNBYL を同一視してよいのであろうか。shah と

RTBYL/ZNBYL を漢文史料の登場人物に比定する作業を今度は読み変えた Ṭabarī の記述の中で行ってみれば答は簡単に出る。煩瑣ゆえ作業を繰り返すことは避けるが、この場合の shah はそれ以前の段階でカーブル奪回の主役となったカーブルシャーすなわち罽賓のテュルク王以外ではありえない。だとするとその兄弟 RTBYL/ZNBYL は同じテュルクでなければならないからあてはまるのは謝颯のテュルク王だけなのである。実際、680から690年頃の同地におけるムスリムと RTBYL/ZNBYL の戦について述べた Ṭabarī [II. 1036, 1042] や *Ta'rikh-i Sīstān* [TS. : 105], Ibn al-Athīr [IA. : IV. 450, 484] は RTBYL/ZNBYL を「テュルクの長, 王」と呼んだり, 彼がテュルクの軍を率いていたと記す。これらの情報と上の推論を組み合わせれば RTBYL/ZNBYL がテュルク系の支配者, すなわち謝颯の突厥王と同一であった可能性はより高まる<sup>6)</sup>。かくして「漕矩吒王」≡「謝颯王」=RTBYL/ZNBYL という図式が成立する。RTBYL/ZNBYL は実はカーブルシャーと同族すなわちテュルク系の支配者であったと考えられるのである。

この考察結果に, 第一章でみた「馨孽朝の王」≡「罽賓のテュルク王」=カーブルシャーとする従来の見解を加味して, 玄奘, 慧超, イスラーム史料の登場人物の関係を改めて示したのが図である。本章で考察の基礎とした罽賓のテュルク王と謝颯王の, またカーブルシャーと RTBYL/ZNBYL の血縁関係は, 図中に示したように Ṭabarī の shah (カーブルシャー) と慧超の記録する罽賓のテュルク王が同一人物であることを要求するが, その王は『冊府元龜』等に名が見える「罽賓王烏散特勤灑」にあたる [桑山 1990 : 263-264]。『冊府元龜』巻964外臣部封冊 2 [台湾中華書局印行本 : 11346] によれば彼は老齢のため738年以前に退位した。Ṭabarī の記述を用いるならその登位は遅くとも680年前後であった筈である。かくして我々はその在位年代をおおまかに決定し得る王を一人得るのである。これをもとにしてカーブルのテュルクシャーの編年を検討する作業がなされねばならない。

### 3. ザープリスターンにおける RTBYL/ZNBYL の王国の成立

それでは同族である RTBYL/ZNBYL とカーブルシャーは何故異なる称号を持ち, あたかも別種の王であるかの如くイスラーム史料に現れるのであろうか。その点を考えるための手がかりが, shah と RTBYL/ZNBYL の間に仲たがいがあったとする Ṭabarī の記述である。不和の原因については不明であるが, Ṭabarī の記述に従えばその状態は少なくとも七世紀終わり近くまで続き, RTBYL/ZNBYL はムスリム勢力に背いた後もザープリスターンで自立していたと考えられる。そうすると, 謝颯王が「おじ(罽賓王)に

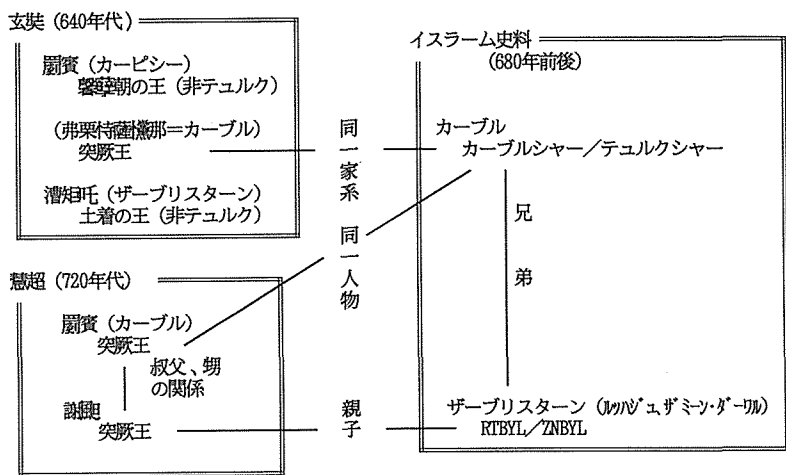


図 各史料の登場人物の関係

も属さない」という慧超の不可解な記述の謎は解けるかもしれない。慧超の時代、謝颯王すなわち RTBYL/ZNBYL は罽賓王と同族ではあったが、自立した存在であったと考えられるのである。ラフマン [1979 : 66] はほぼこの通りにザープリスターンの RTBYL/ZNBYL の王国の成立事情を説明している。ただし、七世紀末から八世紀初にかけての罽賓、謝颯両国の関係は、実はいまして複雑である。『冊府元龜』卷970外臣部朝貢3 [台湾中華書局印行本 : 11404] は景雲元年(710年)十月、謝颯国と罽賓国が一緒に朝貢してきたことを伝え、また『新唐書』卷221下謝颯の条 [標点本 : 6253] は「国中には突厥、罽賓、吐火羅の人々が雑居している。罽賓はその子弟を兵として採用し大食にあたっている。景雲の初めに使を送って朝貢してきた。後にはついに罽賓に臣従した。(國中有突厥罽賓吐火羅種人雜居。罽賓取其子弟持兵以禦大食。景雲初。遣使朝貢。後遂臣罽賓。)」と記す。また同じく『冊府元龜』卷964外臣部封冊2 [台湾中華書局印行本 : 11344] は開元八年(720年)の記事として「九月、[唐は]使者を送って葛達羅支頡利發誓屈爾を謝颯国王に冊立し、葛達羅支特勒を罽賓国王とした。(九月。遣使册葛達羅支頡利發誓屈爾爲謝颯國王。葛達羅支特勒爲罽賓國王。)」とする。これらの漢文史料は、710年から720年頃にかけて罽賓と謝颯がかなり緊密な関係、少なくとも共に使者を送ってきたりあるいは合同してアラブ・ムスリムの北進に対抗するようなそれを持っていた、という雰囲気を与える。『新唐書』が「後にはついに罽賓に臣従した。」というのがいつの何時のことをさすのかははっきりとはわからないが、同書は続けて「開元八年、天子は葛達羅支頡利發誓屈爾を冊立して

王となした。天宝年間に至るまで[謝颯は]数度朝献してきた。(開元八年。天子册葛達羅支頡利發誓屈爾爲王。至天寶中數度朝獻。)[標点本：6253-6254]と記しているから、それが景雲元年からそう隔たる時期のことではないと考えられる。だとすると Tabari の伝えるカーブルシャーと RTBYL/ZNBYL の仲たがいと、慧超の記す謝颯王がおじからも自立しているという報告をそのまま結び付けるのはためらわれる。地理的にもザープリスターンはカーブルと、スイースターンに拠点をおくムスリム勢力の間に位置し、カーブルシャーにとってザープリスターンとの友好関係、同盟関係を保持しておくことは戦略上極めて有利である。またザープリスターン側にとってもムスリム軍との戦いのための有形無形の援助をカーブルから得られるというメリットは大きかったはずである。そのような両者が七世紀末から八世紀の20年代にわたるまでの間ずっと反目し対立していたとは考えにくい。八世紀の初頭までの間に両者の関係は改善されたと考える方が自然であろう。ところが慧超は謝颯王が叔父から自立していると伝える。カーブルと同盟関係を結んではいたが決して臣属したわけではなく、ザープリスターンはザープリスターンとして自立した王国であり、それゆえ慧超は「他国に臣属していないし、おじにも属さない」と記したのであろうか。『冊府元龜』卷979外臣部和親2 [台湾中華書局印行本：11501]、『資治通鑑』卷212 [標点本：6762] は開元十二年(724年)に謝颯王「特勒(勤)」からの使者が入朝したことを記録するが、ペテク [1964：192] は先に「頡利發」の称号を受けた謝颯の王がここで「特勒」という上級の称号を名乗っているのは慧超が謝颯王の自立を記しているのと符合する、と観察している。もしペテクの観察通りこの記事がカーブルとザープリスターンの関係の再度の変化、すなわち後者の前者からの自立を反映したものならば、一時は関係を復した両者が慧超の往訪の直前に再びそれ以前の状態に戻り、慧超はその状態を記録したのかも知れない。どちらが正しいのか現段階では判定し得ないが、いずれにせよ Tabari の記事と慧超の記事を組み合わせることによって同じ家系の出であるカーブルシャーと RTBYL/ZNBYL が異なる称号で呼ばれ、独立した王としてそれぞれの王国を統治していた背景を窺い知ることができるのは確かであり、その点ではラフマンの視点は正しい。

以上述べ来たように、ザープリスターンの RTBYL/ZNBYL の王国は七世紀後半、おそらくは670年代から80年代にかけて何らかの原因でカーブルのテルクシャー朝から分かれて成立したものであると考えられる<sup>7)</sup>。すなわちカーピシー、カーブルのみならずザープリスターンにおいてもこの時期王統の交代、あるいはあらたな王権の成立がみられたのである。

## 4. RTBYL = eltäbär ?

ここまで本稿ではイスラーム史料に現れるザブリストーンの支配者を RTBYL/ZNBYL と表記してきたが、それはこの語をどう読むかについて古くから議論があり未だ定説がないためである。すなわちこの語は写本の点のふりかたによって少なくとも二通りに読める。マルクヴァルト [1901 : 248ff. ; Maquart & de Groot 1915 : 280-1, 287] はこれは RTBYL ではなく ZNBYL と読むべきだとし、語の前半部の ZN を『隋書』巻83 西域伝漕国の条に現れる順天神、『大唐西域記』巻12漕矩吒国の条の穆那天神、すなわちズーン(zūn)神に関係あるものだと考え、そのもとを zūn-dātbar ではないかとした。彼以後ヨーロッパにおいてはこの説が広く受け入れられ、語の読み自体も踏襲されてきた。Ta'rikh-i Sīstān の校訂者バハール Malik al-Shuārā Bahār も同書の中で ZNBYL の読みを取っている(ただしバハールは Zanda-pīl > Zanbīl というエティモロジーを考えている)。ボズワース C. E. Bosworth [1968 : 35] もマルクヴァルトにならって Zunbīl の読みをとり、それがやはり『隋書』の漕国王「順達(zūn-dadh と復元できるという)」と関係あるのでは、という。また、ザブリストーンにおけるイスラム化以前の信仰を扱った極めて難解な論文の中でスカルチア G. Scarcia はこの読み方を追認し [1965]、そのエティモロジーに関してはこれまた難解なノート [1966] の中で、bīl < pīl < pāl = parwar(NP) という変化から「Zūn の子孫」と言う意味である、あるいは Zav の古い形 Hazohnwa から (Ha)zohnw(a) + ila = Zohnwil(a) > Zonwil > Zunbil という変化を考え、「ザーヴの子孫」という意味ではないか、と述べた。なお ZNBYL の読みをとる諸説はスカルチア [1967] によりまとめられている。ウィंक [1990 : 118] も Zunbīl の読みをとるが、このスカルチアの説にも言及せず、ただマルクヴァルトのエティモロジーを挙げるのみである。

これに対してアフガニスタンのハビービー 'Abd al-Ḥayy Ḥabībī は RTBYL の読みをとる。彼はこの語はアフガニスタンの言語で解くべきだと考え、後半部の BYL はパシュトゥー語の pāl(ペルシア語の parwardan にあたる)で、おそらくは後のヒンドゥーシャー朝の王達の名前、Gawpāl, Anandpāl, Jaypāl 等の後半部と共通するのではないかという。また前半部の RT に関してはアヴェスターの中にある gatha ratu に類を求める。そして RTBYL の意味に関しては「愛情をもって育てられた」「愛情ある女性に育てられた」「寛容と知性を育てるもの」といった不可解な意味をあげる [Ḥabībī 1985 : 65-70]。

言語学的な吟味は筆者のよくするところではないが、この議論には未だ決着がついていないようである。それは両者とも決定的な決め手にかける、すなわち前者はこの語が

ズーン神の信仰やスィースターン、ザーブリスターンの英雄譚と関係があるという前提に立ち、後者はこれを同地固有の言語(ハビービーによればパシュトゥー)によって解きうるという前提に立つが、互いに互いの前提を否定できるような根拠を提示しえないため自らの議論を説得力あるものできないからであろう。いずれにせよ両者ともこれをイラン語系で読み解こうとしている点では共通している。しかしこの語、称号はそれほど複雑な手続きを経なければ解読できないのであろうか、という素朴な疑問もわいてくる。なによりもこれらの議論の中からは歴史的状況の中での RTBYL/ZNBYL の姿が一向に浮かび上がってこないというのが最大の問題である。

その後ボンバーチ A. Bombaci はこの問題に関して以上の議論とはやや異なるアプローチを行った。彼は漢文史料に現れる頡利發、俟利發, etc. がテュルク人の間で用いられた称号 *eltäbär* にあたることを論証しようとした論文の中で、RTBYL/ZNBYL は RTBYL の方が正しく、やはり *eltäbär* にあたるのではないかと示唆したのである [Bombaci 1970 : 59]。前述の如くラフマンもこのボンバーチ説に従っている(ただし注記はない)。このような想定が言語学的に有効なものなのかどうか筆者には判断しかねるが、ボンバーチは RTBYL が「音韻的に *eltäbär* とそれほど離れているわけではない」とする [Bombaci 1970 : 59]<sup>9)</sup>。この読みをとった場合それが歴史的状況とどう合致するかについてボンバーチには述べるところがないが、720年に「葛達羅支頡利發誓屈爾」が謝颯国王となった旨『冊府元龜』が記しているのは前述の通りである。そこで、頡利發 = *eltäbär* = RTBYL (頡利發 = *eltäbär* については [護 1967 : 398-438] も参照) と考えるなら、漢文史料の「頡利發」もイスラーム史料の RTBYL も、*eltäbär* というテュルク系の称号<sup>9)</sup>をもったザーブリスターンの唯一人の王を指すことになり、前章までで述べてきたような歴史的状況、すなわちカーピシー、カーブル、ザーブリスターン地方におけるテュルク系支配者の出現という状況とうまく符合して話は非常にすっきりする。すっきりすればいいというものでもないのかもしれないが、この考えをとるなら従来不明とされてきた点が実はもう一つ説明可能となる。すなわち Mas'ūdī [Murūj. : VIII. 42] はサフール朝の Ya'qūb b. al-Laith (位 867? -879) が「ザーブリスターンの王 Frūz b. KBK」なる人物と戦ったとし、Ibn al-Athīr [IA. : VII. 326] は「ルッハジュの王 كبتير KBTYR」(variant لعر) がヤアクーブにより殺されたことを記す。Ta'rikh-i Sīstān [TS. : 215] にはやはりヤアクーブ時代の記述の中に「ZNBYL-KBR の息子」なる語が見える。RTBYL/ZNBYL とは別の名を持つ九世紀のこの支配者はいったい誰なのか。あるいは Ta'rikh-i Sīstān で ZNBYL に付加された KBR とは何か。スカルチア [1967 :



43]は「Zunbrl の majordomus」だと言い、あるいはそれを後に Alptegin によりガズナを追われた支配者 LWYK/ANWK/KWBK に結び付けようとし [1966 : 284], フォルストナー M. Forstner [1970 : 82] は KBK, KBTYR, KBR, etc. を「Zunbrl の別名」だと考えている。しかしもし我々が RTBYL (ZNBYL ではなく) の背後に eltäbär を想定するならば、少なくとも KBTYR **كبتير** はやはり eltäbär の写しそこないと考えられるのである。ボンバーチは後代のイスラーム史料の中で eltäbär がどのように写されているかを列挙しているが [Bombaci 1970 : 27-30], そこにもひかれる Rashīd al-Dīn の *Jāmi' al-Tawārikh* はウイグルについての記述において **ايلتير** [JT. : 337] と写している<sup>10)</sup>。これを参考にして、アラビックによる eltäbär の転写として \***ايلتير** あるいは \***التبير** というような形が想定できるとしたら **كبتير** は第一子音の **ل** ( **اي** あるいは **ا** が脱落し、**ك** は **ل** の写し間違いと考える)、最終子音の **ر** が整合する点では RTBYL よりも eltäbär に近い。Ibn al-Athīr に見られる **لسعر** という variant もこの推測を支持してくれるであろう。この推測が正しければ KBTYR=eltäbär=RTBYL となる (KBK, KBR 等はその崩れた形と考えることも不可能ではなからう)。そして九世紀のザブリスターンに RTBYL と別の支配者を想定する必要などなくなるのである。

いずれにせよ、ザブリスターンの王の系統に関する前章までの議論が有効なものだとすれば、その歴史的状況に合致するという点で RTBYL=eltäbär 説はそれ以前の議論よりも優れていると考えられる。実際ペテク [1964 : 194] やスカルチア [1967 : 44] が、この時代のザブリスターン地方にはテュルク系の支配者、住民がいたことを認めながらも、支配者の称号についてはイラン語で読み解く立場に立つ ZNBYL 説をとっているのは極めて不自然に見える。

## 5. 結びにかえて

以上、ラフマン、桑山両説の検討を行いながら、七、八世紀のカーピシー、カーブル、ザブリスターンの状況とその支配者について屢々述べてきた。推論に推論を重ねるという行論の性質上わかりにくい部分もあったかと思われるので、ここで本稿で述べてきたことをまとめ、七、八世紀の同地の歴史を概述して結びにかえたい。

玄奘の来訪以後、カーピシー=ベグラームに居を構えていた馨摩王朝に服していた「弗栗特薩嚩那」すなわちカーブル地方の突厥の首領(テュルクシャー)がムスリムの北進と戦いながら徐々に勢力を伸ばしていった(645-666頃)。680年頃、テュルクシャー(慧超の「鬪賓王」)の兄弟 RTBYL(慧超の時の「謝颯王」の父=eltäbär)は何らかの原因でテュル

クシャーと袂をわかちムスリム勢力をたよって南下した。後ふたたびムスリムと離れテュルクシャーと友好関係を回復するが、ザーブリストーン地方に独自の勢力を築き、この後この系統の支配者は RTBYL=eltabār の称号で呼ばれることとなる。683年あるいは686-7年には初代の RTBYL がムスリム軍に殺され、息子が二代目となる。八世紀初頭までの間に馨摩王朝の王はカーブルのテュルクシャーに殺され、ガンダーラをも含む旧カーピシー王国領はテュルクシャーのものとなる。同時にこの国の中心地がベグラームからカーブルに移動していく。かくして七世紀の後半にほぼ同時に現れたカーブルシャー、RTBYL というテュルク系の王家はその後百年余の間ともにムスリムの北進に抵抗するが、前者は九世紀半ばにガンダーラに興ったヒンドゥーシャー朝に倒され、後者はやはり九世紀の70年代にサッファール朝の手で KBTYR=RTBYL=eltabār が討たれたことによって滅び、アフガニスタン東部におけるテュルク系王朝の支配は一旦終わりを告げることになる<sup>1)</sup>。ガズナに本拠を置く新たなテュルク系の支配者がこの地に現れるのはそれから約一世紀後のことである。

以上は桑山、ラフマン、ボンパーチらの説に基いて筆者が想定した一つの試案であり見通しに過ぎない。ただ、なるべく多くの事柄を整合的に説明できるものを(作業)仮説と呼ぶのであれば、本稿で述べてきたことにもなにかしかなの意味はあるかと思う。

## 注

- 1) 本稿において大文字のみでローマナイズされているものは、アラビックより子音のみがわかるが母音が不明であることを示す。
- 2) ラフマン [1979: 42-44] は RTBYL の属していたのは Ibn Khallikan に記されるとおりハラジュのテュルクであり、彼らの一族はもともとは Zamīn Dāwar の辺りにいた “Dāwarī Turk” であったとし、ゆえにテュルクシャーもハラジュのテュルクである、と述べる。慧超によればテュルクシャーはガンダーラから勢力を伸ばしたことになるので、彼らはザミン・ダーワルからガンダーラに移住し、そこで勢力を伸ばし、その後カーブルで王権を握ったというのである。しかし、いかなる理由にせよ最初ザミン・ダーワルにいたハラジュがその後わざわざガンダーラへ行き、それからカーブルで政権を握ったというのは奇妙である。ラフマンはおそらく慧超の記事の解釈を誤ったのであろう。慧超は決して「突厥王の阿耶」がガンダーラから勢力を伸ばしたとは言ってはならず、たまたまガンダーラが慧超当時の罽賓王の治下にあったためにその箇所ですべているだけで、その記述からだけでは事件そのものの起きた場所日時は特定できないのである。
- 3) これは桑山氏が私的会話において提示された考えであるが、詳しくは近刊の *East and West* に発表される氏の論文に述べられる予定と聞く。

- 4) ラフマンはこの記事の中でムアーウィア治世とされているのは Salm b. Ziyād の年代を考える限り、実はその息子ヤズィード時代のことであるとする [1979 : 66, n. 26] が、Salm b. Ziyād の方が誤りである可能性も勿論あるので一概には決められない。
- 5) ガズナのまちは実はイスラーム時代初期には Ghazna/Ghaznīn ではなく Zabul/Zabulistān という名で呼ばれていた可能性があるが、この点については別稿を準備し詳論したい。
- 6) Ṭabarī の記事にもう一つ興味深い点がある。文中のムアーウィアの言葉にある、ザランジュのまちと AML (=Zabul ?) の間に「**نكرغدر** NKRGHDR の民」がいるという話である。これは「**تکوزغوز** Tukuzghuz の民」を意図したものであろう。イスラーム史料に言う Tukuzghuz (Tuquzghuz) は一般にウイグルを中心とする遊牧民の部族連合体を指すという [Minorsky 1970 : 263ff./cf. 片山 1981] が、その実態ははっきりとはしていない。ここでいう Tukuzghuz が何を指すのか自体明らかではないが、Iṣṭakhrī が「ハラジュはテュルクの一種で昔ヒンドとスィジスターンの間、グルの背後の地にやってきた。家畜を所有し、テュルクの性質、衣服、言語を持っている」[Iṣṭ. : 245] と述べるのと考えあわせると極めて興味深くはある。ハラジュの他に十世紀以前に Tukuzghuz と呼ばれるテュルクが同地にいたのかも知れないし、あるいはここでいう Tukuzghuz がハラジュ自身にあたる可能性も出てくるのである。それはカーブルのテュルクシャーや RTBYL/ZNBYL の系統の問題にも大きく関わってくる可能性を持つが、現時点では断定的なことを言うには材料が少なすぎる。
- 7) Ṭabarī は RTBYL/ZNBYL がカーブルシャーのもとを逃れてきたのが、ムアーウィア治世であったとしている。ムアーウィアの在位は 661-680 年であるから、この事件が Baladhurī [Murgotten 1969 : 147] に述べられる、カーブルシャーによるカーブル奪回後の RTBYL/ZNBYL のザブリスターン、ルッハジュ、ブストへの到来にあたる可能性もある。もし AML =Zabul と考えるなら、ラフマンのいうように RTBYL/ZNBYL がシャーによりまずザブリスターンへ派遣されそこでシャーと仲たがいをしたとすると、RTBYL/ZNBYL がザブリスターンから逃れてきて AML (=Zabul) にとどまったという奇妙な事態になるからである。
- 8) RTBYL=eltābār と考える場合、RTBYL では eltābār の語頭の母音 e-(あるいは i-) の脱落、子音 l と r の逆転という現象が起きているのが目につく。ボンバーチは非トルコ語非漢文文献に現れる eltābār の variant として litβr, ilit'ver, litber/iltber 等をあげる [Bombaci 1970 : 36]。またソグド語で eltābār を 'yrtp'yr とし、第一子音を r で写す例が [吉田・森安・新疆ウイグル自治区博物館 1988 : 9-10] に挙げられている。
- 9) ボンバーチは eltābār 自体はトルコ語ではなく、柔然からの借用語かも知れないとしている [Bombaci 1970 : 35]。
- 10) 正確には、脚注に ILTRYR/ILBTR という形が挙げられ、本文のような形に校訂されている。尚 [Hamilton 1962 : 40] 参照。

- 11) 960年頃 Alptegin によりガズナを追われた同地の支配者 LWYK/ANWK/KWBK がスカルチアの言う如くに RTBYL の系統に連なる者だったとしたら、アフガニスタン東部におけるテュルク系の支配の伝統は九世紀以降も絶えることなく続いていたということになるが、この点に関してはいまのところそれを裏付ける如何なる材料もない。

## 文献表

### 〈史料〉

- Buldān. : al-Ya'qūbī, *Kitāb al-Buldān*, ed. M. J. de Goeje, BGA 7, Leiden, 1967.  
 Historiae. : al-Ya'qūbī, *Historiae*, 2vols., ed. M. Th. Houtsma, Leiden, 1969.  
 IA. : Ibn al-Athīr, *al-Kāmil fī al-Ta'rikh*, 13vols., ed. C. J. Tornberg, Beirut, 1979.  
 IKh. : Ibn Khurdadhbih, *Kitāb al-Masālik wa'l-Mamālik*, ed. M. J. de Goeje, BGA 5, Leiden, 1967.  
 Ist. : al-Istakhṛī, *Kitāb al-Masālik al-Mamālik*, ed. M. J. de Goeje, BGA 1, Leiden, 1967.  
 JT. : Рашид ад-Дин, *Джами' ат-Тавāрих*, Том I, часть 1, критический текст А. А. Ромаске-вичя, А. А. Хетагулова & А. А. Али-Заде, Москва, 1965.  
 Murūj. : al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab wa Ma'ādan al-Jawhar*, 9vols., ed. & tr. C. Barbier de Meynard & Pavet de Courteille, Paris, 1861-1877.  
 Tabarī. : al-Tabarī, *Ta'rikh al-Rusul wa'l-Mulūk*, 3 ser., ed. M. J. de Goeje, Leiden, 1879-1901.  
 Tanbīh. : al-Mas'ūdī, *Kitāb al-Tanbīh wa'l-Ishraf*, ed. M. J. de Goeje, BGA 8, Leiden, 1967.  
 TS. : anon. *Ta'rikh-i Sīstān*, ed. Malik al-Shu'arā Bahār, Tehran, 1935.  
 『大唐西域記』 章巽校点, 『大唐西域記』上海人民出版社, 1977.  
 『新唐書』 中華書局標点本.  
 『冊府元龜』 台湾中華書局印行本.  
 『資治通鑑』 中華書局標点本.  
 『往五天竺国伝』 羽田 1941 を見よ.

### 参考文献

- Bombaci, A.  
 1970 On the Ancient Turkic Title *Eltäbär*. In : *Proceedings of the IXth Meeting of the Permanent International Altaistic Conference*, Naples, pp. 1-66.  
 Bosworth, C. E.

- 1968 *Sistān under the Arabs, from the Islamic Conquest to the Rise of the Saffārids (30-250/651-864)*, Roma.
- Chavannes, E.
- 1903 *Documents sur les Tou-Kiue (Turcs) occidentaux*, Paris.
- 榎一雄
- 1951 エフタル民族の起源, 『和田博士還暦記念東洋史論叢』, 講談社, pp. 133-150.
- Forstner, M.
- 1970 Ya'qub b. al-Laiṭ und der Zunbīl. *ZDMG*, 120/1, pp. 69-83.
- Ḥabībī, 'Abd al-Ḥayy
- 1985 *Ta'rikh-i Afghānistān ba'd az Islām*, Tehran.
- Hamilton, J.
- 1962 Toquz-Oγuz et On-Uyγur. *JA*, 250, pp. 23-63.
- 羽田亨
- 1941 慧超往五天竺國傳逐録, 『羽田博士史學論文集 歴史篇』, 同朋舎出版, 1975(第二刷), pp. 610-629.
- 稲葉穰
- 1991 書評: 桑山正進著『カーピシー=ガンダーラ史研究』, 『オリエント』34-1, pp. 118-124.
- 片山章雄
- 1981 Toquz Oγuzと「九姓」の諸問題について, 『史学雑誌』90-12, pp. 39-55.
- 桑山正進
- 1987 (訳注)『大唐西域記』(『大乘仏典 中国日本篇 9』), 中央公論社.
- 1990 『カーピシー=ガンダーラ史研究』, 京都大学人文科学研究所.
- Maróth, M.
- 1990 Die politische Geographie Afganistans im 7.-8. Jahrhundert. In: J. Harmatta (ed.), *From Alexander the Great to Kül Tegin*, Budapest, pp. 133-137.
- Marquart, J.
- 1901 *Ērānšahr nach der Geographie des Ps. Moses Xorenac'i*. Berlin.
- Marquart, J. & J. J. M. de Groot
- 1915 Das Reich Zābul und der Gott zūn vom 6.-9. Jahrhunderts. In: G. Weil (herausgeben), *Festschrift Edward Sachau*, Berlin, pp. 248-292.
- Minorsky, V.
- 1970(tr.) *Hudūd al-'Ālam (the Regions of the World)*, 2nd ed., London.
- 護雅夫

1967 『古代トルコ民族史研究』I, 山川出版社.

Murgotten, F. C.

1969 *The Origins of the Islamic State, being a translation from the arabic accompanied with annotations geographic and historic notes of the Kitāb Futūḥ al-Buldān of al-Imām abu-l 'Abbās Aḥmad ibn-Jābir al-Balādhuri, part 2.* New York (rep.)

Petech, L.

1964 Note su Kāpišt e Zabul, In : *Selected Papers on Asian History*, Roma, 1988, pp. 187-194.

Rahman, A.

1979 *The Last Two Dynasties of the Śāhis*, Islamabad.

Scarcia, G.

1965 Sulla religione di Zābul. *Annali dell'Istituto Universitario Orientale di Napoli*, 15, pp. 119-165.

1966 Ancora su Znbyl. *Annali dell'Istituto Universitario Orientale di Napoli*, 16, pp. 201-205.

1967 Zunbīl or Zanbīl. In : *Yādnāme-ye Jan Rypka, Collection of Articles on Persian and Tajik Literature*, Prague, pp. 41-45.

吉田豊・森安孝夫・新疆ウイグル自治区博物館

1988 麹氏高昌国時代ソグド語文女奴隷売買文書, 『内陸アジア言語の研究』4, pp. 1-50.

Wink, A.

1990 *Al-Hind: The Making of Indo-Islamic World*, Vol. 1, Leiden & etc.

---

西南アジア研究 第35号 1991年9月25日印刷 1991年9月30日発行  
 編集兼発行者 京都大学文学部内 西南アジア研究会 代表者 小野山節(副会長)  
 年会費 維持会員20,000円, 一般会員(大学院生を含む)6,000円, 学生会員(学部在学者)4,000円  
 振替口座 京都8-19867 印刷者 京都印刷紙工株式会社 京都市伏見区毛利町6

---